

漁村の民俗世界

田邊 悟

はじめに

日本常民文化研究所が神奈川大学に招致され、この度、二十年を迎えられたことは慶賀の至りである。本会場に列席の大勢の方々と共に祝意を表し、さらに今後の発展を期待したい。

この間、初代の山口徹所長から橘川俊忠所長に至るまで、その活動・運営に尽力されたことに対し敬意を表す。また、筆者個人としても、これまで種々、指導をたまわったことに対し謝意を申しあげる。

今回、日本常民文化研究所が設立以来の研究目標の大きな柱の一つとして位置づけてきた「漁業・漁村のテーマ」に関して、発表の機会を得ることができたことを光栄に思っている。

筆者が最初に「漁業・漁村」に関する研究主題のことで日本常民文化研究所を訪問したのは昭和三十六年から昭和四十五年にかけての頃であった。今からおよそ三十年、あるいは三十五年も前の古いことである。

当時、研究所は吉祥寺の武蔵野美術大学の一室におかれていた。椅子やソファの肘掛けのところが磨り減り、白い

はずの椅子のカバーはアメ色をしていたのが印象的であった。お世辞にも「きれいな研究所」という印象からはほど遠かったが、「常民を研究する場所」とはこういうものかと感得した。

しかし、研究所の中味は別で、昔も今も変わらず、研究所の所員は「輝いて」おり、「錚々たる先生方」というか、「多士済々」といった感じであった。

帰りは研究所から吉祥寺駅まで櫻田勝徳先生と二人で歩き、必ず「寄道」をするのも楽しみで、櫻田先生の口ぐせは、「気取らない店」でいこうという言葉であった。懐かしく思う。

その後、研究所は三田郵便局やオーストラリア大使館に近い澁澤邸跡のマンションの八階の一室に移り、研究所の部屋は綺麗になったが設備（備品・家具・調度品）は以前と同じであったような記憶がある。日本常民文化研究所編で、慶友社が『民具論集』を刊行しており、その第三集が出版された昭和四十六年頃のことだと思われる。

さらに研究所は神奈川大学に移り、初代所長の就任以後、最初に訪問したとき、施設、設備はもとより、すべてが「輝いて」いたのに驚嘆させられた。

（当日の配布資料の確認・説明は省略）

(1) 漁村（海付きの村・海村）の研究史と民俗学

ここでは、これから民俗学サイドで、漁村（海付きの村・海村）の研究をおこなっていくにあたり、なにを明らかにしなければならぬか（課題目的）について述べたい。

この方面の研究に志をもち、興味や関心をよせ、あるいは、これまでの研究を発展させるための参考になれば幸甚である。

日本民俗学の本流は、いうまでもなく農村・農民の伝統文化の研究にあった。そうした流れの中であって、櫻田勝徳先生は、どうして漁村・漁民の研究に着目したのであろうか。

筆者は、櫻田先生が著した『漁村民俗誌』（昭和九年）や『漁人』（昭和十七年）等の労作がこの方面の古典的な研究成果として高い評価をうけ、一家をなしていた後に、東洋大学の田辺寿利先生の紹介で拝眉の榮に浴した。

その頃、櫻田先生はさらに『漁撈の伝統』（昭和四十三年）を著され、ひきつづき『海の宗教』（昭和四十五年）を刊行された。

『海の宗教』執筆にあたっては「筆がはこび、五ヶ月ほどで上梓したが、出版にあたっては誤植が多かった」といって、著者自身が訂正して高著の惠贈をうけた記憶がある。

当時、筆者の質問に対して、櫻田先生は、「皆があまり注目しない民間伝承の中にも、民俗的な意味をもつものがある」ことを強調された。その結果が漁村・漁民の研究を主眼とすることになったと考えられる。またこのように非農民の文化を究明する意図は「技術史的な側面を調査・研究する」ことの重要性を強調されたことに関連する。

このテーマは河岡武春氏や大島暁雄氏の『上総掘りの民俗』（技術民俗論の課題）等と錯綜するので別の機会に論考をかさね、議論していただきたい。

「研究史」と「民俗学」としてのアプローチについて述べると、これまで「漁村」とよばれてきた「海付きの村」または「海村」に関する調査や研究は、学問の各分野においておこなわれてきた。

例えば、地理学では、自然地理学、人文地理学にとどまらず、水産地理学、漁村地理学、経済地理学、歴史地理学などの分野別に専門分化されてきた。

同じように歴史学分野でも、漁村史、漁業史、漁業経済史、漁業技術史などの研究成果がある。中でも小沼勇氏の

労作『日本漁村の構造類型』（昭和三十二年）は民俗学、社会学に与えた影響が大きかった業績であり、『明治前日本漁業技術史』（昭和三十四年）は明治期に編まれた『日本水産捕採誌』とともに民俗技術の分野にとって裨益するところ大であった。

また、社会学では農村社会学、都市社会学の後を追うように水産社会学、漁村社会学、漁村教育社会学といわれる分野まで分化してきた経緯と実績がある。

それにあわせて注目すべきは「自治体史」の中にみるべき業績があり、中でも近世史の中で最近刊行された『沼津市史』（史料編・漁村）はその代表といえる。

このような隣接諸科学進展の中で、「民俗学的側面」から「漁村」を研究することの意義、目的、方法、内容等について考察することが重要課題である。したがって、このことについては、レジメに示したコンテンツ(2)の冒頭で述べることにする。

あわせて、漁村・海付きの村あるいは「海村」の研究史（学史）に関しては、紙幅、時間的制約があるので詳細については述べられない。高桑守史氏の『日本漁民社会論考』を参照していただきたい。

まず、「海村」の語は、昭和十四年（一九三九）に牧田茂氏が『ひだびと』（第七卷三号）において「海村民俗覚書」を発表したが、同氏は同じ昭和十四年八月の『水産界』（第六八一号）に「男鹿半島漁村採訪記」を発表している。したがって当時は本人も「海村」という語も「漁村」という語とともに、あまり意識していなかったようである。その翌年の昭和十五年（一九四〇）に、同氏は、「海民」という言葉を使うようになる。

同氏の、昭和十五年（一九四〇）の六月と七月、昭和十六年（一九四一）三月の三回にわたり『國學院雑誌』に掲

載された論文「海民信仰論」がそれである（第四六卷六号、第四六卷七号、第四七卷三号）。

他方、その頃の「漁業等に関する民俗研究」の動向をみると、アチック・ミュージアムでは昭和十年（一九三五）七月三十日に『アチックマンスリー』の第一号を発刊しており、その記事の中に澁澤敬三氏ははじめ櫻田勝徳氏など六名ほどで静岡県の三津に行ったことなどがみえる。

その『アチックマンスリー』第七号（昭和十一年へ一九三六）一月三十日）に、祝宮ほろりみやしず静氏が「海村の人々」と題して、姫島から佐賀ノ関方面の採訪の記事をよせている。

この間の動向を、さきに述べた牧田茂氏の昭和十四年以降の研究成果に重ねてみると、昭和十一年に祝宮静氏が「海村」という表現を用いたのは三年ほどはやく、最初であったとみられる。しかし、「海村」という言葉を用いたいきさつや経過、概念などに関しては、筆者がこの件について気づくのが遅れたため、祝氏本人から直接伺っていないので、今日では事実だけが生きていくにすぎない。

それ以前の、この方面の研究成果に関しては前述したように櫻田勝徳氏による『漁村民俗誌』『漁人』等があり、大きな足跡を残した。

こうした時系列的な学史とは別に、柳田國男氏が昭和二十三年にまとめ、翌年、日本民俗誌叢書の(1)として三省堂から発刊した『北小浦民俗誌』の中で、柳田氏は「海と海ばたの村」の生活にふれた。

その中で、「新潟県佐渡内海府村」の「海府」という地名に注目した。すなわち、「内海府」「外海府」などの地名は阿波や豊後の海府郡あまや、他地の「海部郷あまごう」のように、アマベ（海部）であり、「海人の村あま」であるとした。

そして、香取神宮の中世の文書にある下総常陸の「海夫」（カイフ・カイブ）にもふれたことは特筆すべきである。

『北小浦民俗誌』のはしがきを記した柳田國男氏は、昭和二十三年十月に「浦・磯・岬の村」とか「島と内地の海はたの村」とかいう言葉を用いており、「海村」という語彙を用いていない。だが、翌昭和二十四年には『海村生活の研究』という標題で、十一名による全国三十カ所の「離島及び沿海諸村に於ける郷黨生活の調査」結果を発表している（傍点筆者）。この調査は昭和十二年から十四年にかけて実施され、百項目の「沿海地方用」（採集手帳）が項目の基本になっており、表題を「海村生活調査項目」とした点が注目され、柳田氏は、その序において「海村調査の前途」と題して逸文を認めている。

次に、前述した研究成果のうち、民俗学サイドにかかわる内容の詳細についてみると、昭和十七年にまとめられた『漁人』（櫻田勝徳・六人社）の中味は、(1)漁業伝承者、(2)漁業労務組織、(3)信仰行事、(4)漁場慣行に就て、の四章にわたっている。このうち、(2)において「村君の残存に就て」（九七頁〜一六二頁）紙幅をさき、『空穂物語』（吹上之下）中に見える「むらぎみ」「あまかづきめ」に注目した。また、『和名抄』以来の文献『神武記』『播磨風土記』中に散見される「村君」は「村邑の長」だとした。

「村君」の項目は『漁撈の伝統』（民俗民芸双書・昭和四十三年）に再掲載されている。

また、櫻田勝徳氏は社会学大系『都市と村落』で「漁村」を分担執筆した。田辺寿利氏の責任編集によるもので、当時、農村社会学で一家をなしていた鈴木栄太郎氏が「農村」を担当したのに対し、漁民・漁村民俗は民俗学の中でも主流でないだけに、非農業民に関する研究内容や項目設定に苦労がみられる。この内容は(1)いろいろな漁村、(2)漁村と地先の海、(3)漁業組織と社会構造、(4)漁村の型・新しい漁村の分化、(5)結記（零細漁業者の編成）、などに関して述べている。

さらに櫻田勝徳氏は『日本民俗学大系』（平凡社・昭和三十四年刊行・昭和五十一年覆刻版）の「生業と民俗」のうち「漁業」の部を担当執筆し、その項目立ての中で、(1)漁業関係の民俗の所在について、(2)漁場・漁法と民俗、(3)漁船・漁獲物分配と民俗、の三項目をあげている。

その他、櫻田勝徳氏は『日本民俗資料事典』（第一法規・昭和四十四年）の「生産・生業」のうち「漁撈」の分野を執筆する中で、漁撈と民俗とのかかわりを詳述している。すなわち、(1)漁撈の種類、(2)漁場、(3)漁撈の方法（A）漁期・（B）漁法（へ鵜縄・鵜竿）、（C）組織）、(4)漁撈の経営、(5)漁船・漁撈用具（A）漁船・（B）漁撈用具（へ漁網・釣鉤・モリ・ヤス・スカリ・カギ・イソガネ・ウケ・ヤナ・タコツボ）、(6)漁獲物の製造・加工、(7)漁撈の習俗（A）船の儀礼・（B）漁祝い・（C）信仰（へ船霊信仰・エビス信仰）、(8)製塩、の八項目がそれである。

以上、櫻田氏の研究、業績を中心に述べたが、その他にも、倉田一郎氏が著した『経済と民間伝承』（遺稿集・東海書房・昭和二十三年）中の「漁獲物分配の諸問題」や、柳田國男氏・倉田一郎氏共著による『分類漁村語彙』（民間伝承の会版・昭和十三年）など、この方面の研究に裨益するところ大であるといえる。なお、上述した『北小浦民俗誌』も倉田一郎氏が調査したフィールド・ノートをもとに柳田國男氏がまとめたものであることを附言しておきたい。

最後に、筆者自身は『海の暮らしと祭り』（国書刊行会・昭和五十二年）の中の「海の暮らし」で、項目を(1)漁村の民俗、(2)漁撈の方法、(3)漁場と漁撈組織など、(4)漁村と交易、(5)海民の信仰、(6)儀礼と禁忌、(7)漁村の褻けと暗れ、について述べた。

また、筆者がこれまで主に注目し、調査してきた「蟹人あま（海士・海女）」研究を例にあげれば「しだいに少数にな

つていく、この原始的な漁業の生活の中に、古い時代の漁人の生活を想像させるいろいろなものがある」（瀬川清子氏「蜃人の生活」『海村生活の研究』）ということが、まず主題設定の発端となつてはじまったといつてよい。

この古い時代の漁人の生活を想像するための具体的な項目（テーマ）として、「漁業権の問題、漁人の移動性、漁人と商業の関係」（前掲書）などがもたれ、蜃人研究が進められてきた。また、漁業関係の民俗の所在について、漁場、漁法の民俗や漁船、漁獲物の分配と民俗などをみる中で、「漁村生活におけるいろいろの伝統的なやり方を見いだす」（前掲『日本民俗学大系』）一つとしての蜃人研究でもあった。

さらに問題の所在、あるいは反省として、これまでの海士・海女の調査、研究の要項においては、「道具・潜水着方法、約束、俗信、潜水漁を専業とする村落の性格」（前掲書）という内容が盛り込まれながら、あまりにも巨視的な民俗調査のため、これらの調査項目が、いかなる問題をさぐり、理解し、解明していくために設定されたものであるのか、不明瞭であるようにみうけられることもあった。

このことは、柳田國男氏の指導による『海村生活の研究』および『離島生活の研究』（集英社・昭和四十一年）によくあらわれている。同氏は、「事実の集積の中からある種の形跡をみだし、それをもとに過去を想像する」という方法を取り、「土地の実例を記述し、他日遠近の各地と比較する」（『北小浦民俗誌』、傍点は筆者）という流儀によるところが多かった。ところが蜃人研究に限定してみるならば、「百項目羅列主義」と「想像」に終ってしまったきらいがある。事実を集積することができれば想像ではなく実証できなければならない。

すなわち、これからの蜃人研究はもとより、漁業・漁村の研究は想像ではなく、実証が必要である。それには物質文化（民具）の側面をも見定めていく努力が必要であり、それが有力な手がかりとなる。

また、蜃人（海士・海女）といつても一年中裸潜水漁に従事している人々は、過去においても多くはなく、農業、漁業、行商（出稼ぎ）など、他の生業とのからみあいの中で裸潜水漁が営まれており、一年間の生業を中心とした暮

らしかたをよく見定めたうえで、裸潜水漁の行為や、潜水に携わる時期、生活の位置づけなどを問題にしななければならず、以上の動向をふまえたところに、蟹人をとおして漁業・漁村の民俗を研究する場があるといえる。

また近年、明治時代の水産絵図に関する研究もさかんになり、全国規模の調査や展示も藤塚悦司氏などによっておこなわれるに至った。こうした資料（史料）も漁業・漁村の民俗世界をみていくために貴重である。

(2) 漁村研究の民俗学的アプローチ

「漁村研究の民俗学的アプローチ」においては、漁村研究の意義、目的はもとより、方法、内容についてみていこうとするもので、本課題の中核をなす部分である。

まずはじめに、「何故に漁村（海村）の民俗学的研究なのか」その意義を明確にしておかなければならない。

その第一は、日本人の民俗文化の中核は農耕を中心に営まれ、形成されてはきたが、「稲作農耕民だけによる伝承」だけで形成されてきたものではなく、四囲環海の国であるために、海と深く、広くかかわりをもって暮らしをたててきた人たちが多かったことから、それらの人々の歴史と文化の所産をみきわめていく側面も重要であることがあげられる。すなわち、アジアのモンスーン地帯の東に位置して、稲作農耕文化を今日まで二千年以上にわたって伝えてきたことにあわせて、縄文文化の時代以前から連綿と、木の実や草の芽、あるいは草根木皮のたぐいを採取（集）してきたのと同じように、海辺での魚貝藻類の捕採や漁撈の伝統が今日まで継続的、伝統的におこなわれてきたところに注目し、その文化要素の中に日本人（わが国民）の文化の古層を探りだしていこうとするものである。

ようするに、海とかかわって暮らしてきた、暮らしの伝統の中に、日本人の基層文化というか、「日本文化の古層」

を探り出すということが大きな意義、目的の一つである。それ故に、漁村・漁民の民俗を調査し、伝承を研究するのであるといえる。

それは稲作農耕的文化以外にも複合・重層化されてきた日本文化の諸要素を明らかにすることである。

その第二は、日本人の生活文化の中に、海とかかわりをもって暮らしてきた人々の文化要素を探り、抽出し、見定めることは、今日のように、経済的価値、貨幣価値が最優先される社会や、契約がなされ、成立することですべての要件を解決しようとしたり、解決されたりする「社会契約論」的な、いわゆるビジネス・ライク（事務的にコトをはこぶ様・職業的）な時代にあつて、これまで日本人が育て、持ちこたえ、伝えてきた知恵（民族的知恵・民族的センス）を生かす（再生する）ことを考える切っ掛けをつくることである。

すなわち、今日のいわゆる、ヒト・モノ・カネの時代にあつて、また、国際化・情報化・高齢化の〈三多化社会〉の中にあつて、あわせて横文字が町中に氾濫する今日、グローバリズム、マーケティング、マネーサプライ、エコビジネス、ベンチャー企業等、数えればきりが無いほど非日本化された社会がそこにある。私達はそうした中で暮らしをしいられている。暮らさざるを得ないというか、暮らすしかない。

こうした世の中にあつて、さらに国際化が進展すれば、日本人は世界に視野を広げ、より国際人になるための道を進むことを選ぶであろう。すでにインターネットなどを通して、「日本人総英語教育（使用）論」が話題になっていくことから、それは窺い知ることができる。

しかし、わが国民は、近い将来、再び国内に眼をむける日が必ずくるであろうことを私は確信している。その時は、日本人が日本人自身のことを今日以上に知りたい、知らなくてはならないと願う時代になっているはずである。

現在、進行中である国際化のあとに、日本人とはなにか、いかなる民族であったのかを必ず問う必要にせまられる時代がくるであろう。ささやかであっても、「消えゆく日本人の記録」を、その日のために私は残しておきたい。研

究者には、記録として残す義務があり、なくてはならないと考える。それが第二の目的である。

ようするに、「脚下を照顧せよ」ということで、遠くばかりに眼をむけるのではなく、身近な日本や諸地域の文化を見定め、それを尊重したうえで諸外国の文化や伝統を尊重すべきであるといえよう。そして変容をも見きわめる。

その第三は、漁村の「民俗学的研究」をおこなうということは、たんに、今後の「漁村（海付きの村）のあり方」や「漁村の生きる道」あるいは「再生の道を探る」というようなものではなく、「漁村にかぎらず、あらゆる社会に対して活用できるような学問的結果をひきだす必要がある」ということである。

過日、成城大学の民俗学研究所で、田中宣一氏を中心に研究を進めている会場で話をさせていただく機会を得た。

その研究は、平成十年度から平成十二年度の三年間、「海村生活の調査」「離島生活の調査」の変容（海村部の社会構造・経済生活・習俗・価値観等の変容）とその諸要因の追求調査という継続研究テーマであり、それにあわせて、「海村研究の現状と課題」について述べるという内容であった。

その際にも申しあげたことだが、柳田國男氏指導により昭和十二年から十四年の三年間にわたり、全国的三十カ所の地域を調査し、その結果を昭和二十四年になって刊行したのが『海村生活の研究』である。

柳田氏は、その序文ともいえる「海村調査の前途」の中で、「浦磯岬の村」を調査する中から「法則」を見いだすことを、くり返し述べている点が注目される。

ようするに、理論や方法はもとより、「法則性」をひきだすことを前提とした調査、研究が望まれるといえるし、また、そうしていかなければならない。

それにあわせて大切なことは、主題設定の理由を明確にすることはもとより、問題の所在を浮き彫りにさせることであることは言うまでもない。

例えば、裸潜水漁によってアワビ採取をおこなう蟹人（海士・海女）に関する研究は、縄文文化の時代にまでさかのぼることができる民俗文化の伝統をもっており、しかも古代社会以来、神饌の御饌（御食）や「熨斗」として贈答用としてのアワビは今日でも祝儀に用いられ、生きているし価値も低下していない。このように、伝統的な文化要素を見定めるためには、ある種の価値の変わらぬものを見つけ出し、見定めて追跡することが必要となる。ところが逆に、同じように伝統にささえられてきたものの中には稲（米）にしろ、絹、鉄、塩など、古い時代には貴重なものとして価値の高いものとされ、特に経済的価値をとまなっていたものが、時代の変遷とともに、今日では伝統的な価値をとまなわれないものになってしまったものなどある。

それ故、研究のテーマ設定にあたっては、「変容」をテーマにしない限りにおいては十分に考慮しなければならぬ点であるといえよう。

方法論についていえば、筆者は『日本民俗学の課題』（日本民俗学会編・弘文堂・昭和五十三年）の「北小浦における民具と生活——民具研究と民俗学——」の中でも述べたように、『北小浦民俗誌』に記載された事実中に客観的に抽象化されていない部分が多いことに気をとめながら、他方、マリノフスキー（Bronislaw Kasper Malinowski）の著した『民族誌・『西太平洋の遠洋航海者』Argonauts of the Western Pacific. 1922』のあみかたに注目してきた。マリノフスキーの場合は、仮説を実証するために野外調査をおこない、そのために『民族誌』をまとめあげてきた。

しかし残念なことに、われわれの学問は、まだそこまで求められない内容なのである。われわれは「ある理論を出発点として、これを通して検証しようとする」側面が少なく、逆に野外調査であつめた資料データをたよりに『民俗誌』をあみ、その中からある理論や方法、法則性をみいだそうとしており、それは手さぐりの段階にとどまっているともいえる。

したがって、今後、民俗学における民具研究と生活に関する調査、研究が一体となることは無論のこと、さらに目

的を具体的かつ明確にしたうえで野外調査を実施していくべきであろう。

レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss) がいう音韻論によれば、言語はその最小の構成単位である音素のさまざまな組合せからなっており、しかも音素の結合の仕方には、それぞれの言語体系に独自の法則が存在しているとみる。彼はこのような「構造言語学」における音素の概念を神話学にもちこみ、神話がいくつかの神話素の組合せからなっていることを指摘して、神話素の結合の仕方の分析をおこなった。

漁村における民俗学研究のうち、漁撈用具等の民具研究の場合もこれと同じことがいえる。

それは個体が民具体系（生活体系）全体から見たばあい、一つの用にとりうるという意味で「用素」として存するものであり、それらの用素がどのような「生活体系」からなっているのか、また、それぞれの自然的、歴史・社会的な背景が異なった地域の物質文化要素を成立させている体系を形成するための用素たりうるかを考えていく。その結果、用素としての民具の結合の仕方によって物質文化を形成し、地域文化を形づくる法則性をさぐりだすという見解をもつことができる。

ただし、民具の構造的把握をおこなう場合には、民具と民具との結びつきのほかに、民具と自然との結びつきがあり、また、民具を製作したり使用したりする技術や、人と人との結びつきもある。したがって「構造言語学」でいわれるような単純な構造論だけでは方法論全体をカバーすることはできない。それは筆者がかねてより提唱している民具研究の方法の一つとしての「鎖状連結法」によることが有用だが稿を改める。

(3) 漁村という「ムラ」の社会構造と漁撈（業）の組織

農村、漁村というムラのとらえかたは生産・生業を主軸としたものである。半農半漁村なども同じである。内容的に疑問は残るがここではふれない（『近世神奈川の研究』村上直編・名著出版・昭和五十年を参照されたい）。これ

に対して、山村というのは自然的、地理的な表現であり、生産・生業を主軸にした分類からはずれる。林業や山樵が暮らしてあれば、他の分類も考えられようか。

漁村も上述のごとく、海村あるいは海付きの村、さらには柳田國男氏の表現をかりれば、「海ばたの村」あるいは「浦磯岬の村」の表現があり、農村を平野村あるいは平場の村として山がちの村と区別することなどがおこなわれてきた。

こうした「ムラ」の社会構造と漁撈（業）の組織に関しては、隣接諸科学の社会学、地理学等における研究業績が民俗学以上に多いといえる。

したがって、ここでは民俗学サイドの視点から注目していかなければならない若干の主題について項目をあげる程度にせざるをえない。以下、その主な項目について順をおって述べたい。

特筆すべきは上述したごとく、「村君の残存」に関してである。『豆州内浦漁民史料』をまとめた祝宮静氏も櫻田勝徳氏と同様に村君の実態については関心をよせていた。このことは漁村における漁撈（業）の形態、組織、方法等を知ることにとどまらず、血縁、地縁、同族（親族・親戚を含めて）や年齢階梯制（若者組や娘組）、網主（元）や網子、船主や船子・乗子、漁業協同組合、親方・子方の関係、さらには経営者と幹部漁夫・漁夫の関係など、あらゆる漁村（業）にかかわる人的組織にかかわりを持ち、漁村の民俗世界に大きな影響を与えてきたのである。

したがって、幻想的な漁村（業）共同体の前近代的な人的組織を解明するための基礎的な研究としても重要な課題である。

しかし、本稿では紙幅の関係があるので、詳細な説明を加えることができない。したがって、斉藤兵市氏による「漁村社会学の課題」(上)、『社会学評論』第五卷第三号・日本社会学会・有斐閣・昭和三十年)中に掲載された地先漁村及び市街地漁村における社会構造を模式化した図をもとに、その内容を説明するにとどめる。

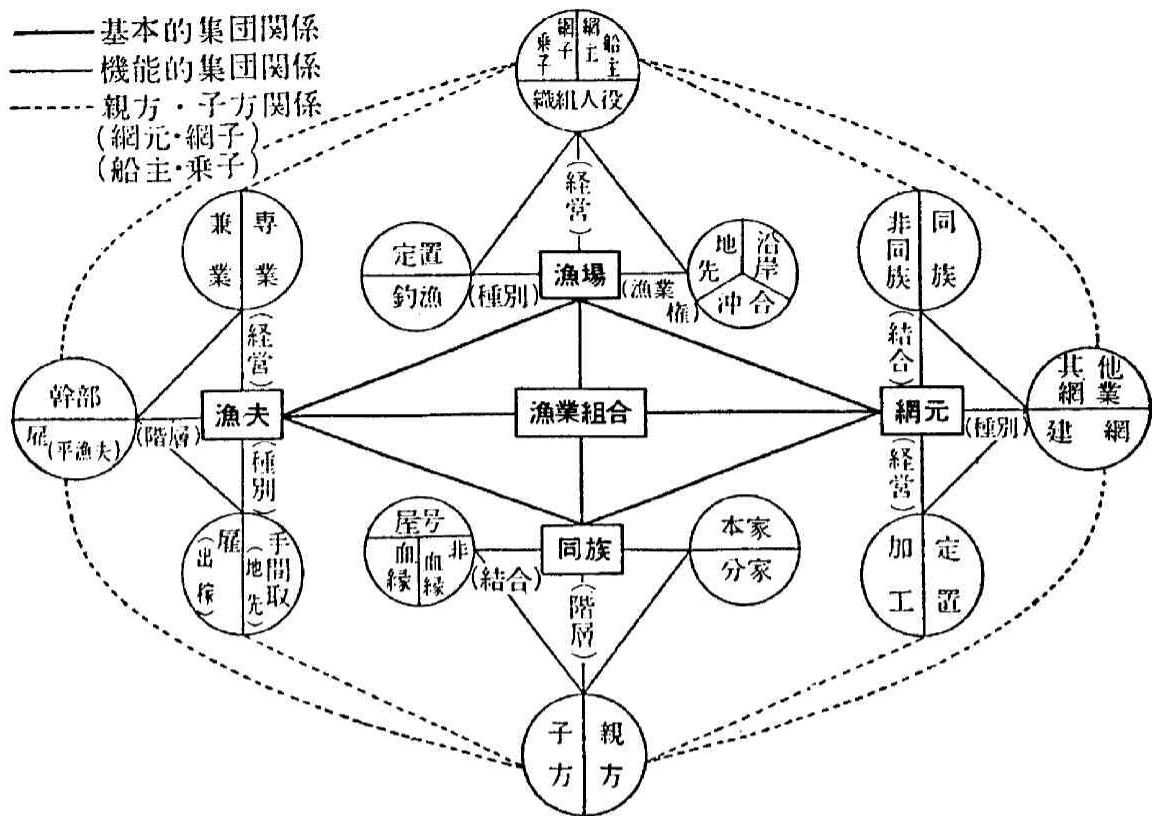
齊藤氏は「漁村は地域的（形式的）には、離島漁村、半島漁村、沿岸漁村にわけられ、集落別（実質的）には地先集落と市街地集落にわけられるとするのが筆者の持論である」と述べる。そして、「前者は地理的分類であり、後者は社会学的分類」だとする。

さらに、「漁村の社会構造とは、漁業集落（地先と市街地）の構造のことであり、再言すれば、生活集団としての集落集団における人間関係を明らかにすることが漁村（漁業集落）の構造を明らかにすることになる」とし、漁業組合（漁業協同組合）を中心にすえた模式図をつくりあげている（注・なお齊藤氏は「部落」と表記しているが、筆者は今日的表現としてなじまないと判断し、「集落」に改めた）。

このように、漁村社会学の分野では、「漁業・漁村」を研究対象としながらも、調査研究の中心はヒト（人）であり、大枠としての「ムラ（村）」の研究がはずされ、いきなり人的結合のヒト（人）の研究におよんでいる点が民俗学的研究と異なる。

その他、隣接諸科学のうち、漁村の民俗世界を知るうえで裨益する研究成果には、鈴木二郎編『都市と村落の社会学的研究』（世界書院）があり、伊豆の伊浜村を例に漁村共同体の分析をおこなっているほか、佐藤政雄氏も『社会学研究』（第一〇号）で「日本海沿岸漁村の生活構造」の調査、研究を発表してきた。

最近の研究成果には『沼津市史』（漁業・史料編）があり、宝永六年（一七〇九）の「四津元取かわせ申候証文」という史料中に、重寺村の四津元が鮪（イルカ）の建網について取りかわした覚書がみられ、「網戸主」と「網戸持」などとみえる。こうした史料中にも漁村における津元（網元・船元）以外の仕組をみることができる。



齊藤兵市「漁村社会学の課題」(上) —— 漁村研究における社会学的諸問題 —— (『社会学評論』第5卷第3号<19>・日本社会学会・有斐閣・昭和30年)より引用。

おわりに

以上、社会構造における同族（本家・分家）、親方・子方の問題、漁家で幼少の男児を養子などと称して迎える慣習や静岡県御前崎の「カドの制度」など漁村特有の研究課題としてとりあげなければならない分野が多いにもかかわらず積み残してしまった。後日に期したい。

資料

- 拙稿「海村生活の民俗」相模湾沿岸における気象俚諺と観天望氣を中心に（『神奈川県史研究』第29号）
- 拙稿「海村生活の民俗」相州における風位方言を中心に（『民俗』第99号・相模民俗学会）
- 拙稿「相州の沿岸潮流呼称と方言」（横須賀市人文博物館研究報告書・第33号）
- 拙稿「相州の海神・漁神と船神（船霊）信仰」（前編）（横須賀市人文博物館研究報告書・第26号）
- 拙稿 前掲書（後編・第27号）
- 拙稿「相州の漁撈伝統と習俗」（前編）（横須賀市人文博物館研究報告書・第40号）
- 拙稿 前掲書（後編・第41号）
- 拙稿「夜漁の習俗と伝統」（図表のみ）（横須賀市人文博物館研究報告書・第34号）